

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530995

研究課題名(和文) ゲートキーパーとエンドユーザー同士の相互作用の経年変化の解析

研究課題名(英文) Analysis of the secular variation of the interaction between a gatekeeper and end users

研究代表者

三崎 隆 (MISAKI, Takashi)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：70360964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：小学校におけるgatekeeperとend userの経年変化を調査した。その結果次の点が明らかになった。第一に、教科に依らずいずれの授業においても、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童の方が、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童よりも、一番分かりやすく教えてくれた人と回答される児童の割合が多い。第二に、教科に依らずいずれの授業においても、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童の方が、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童よりも、相手の理解の状況に合わせて理解を促すようにして教える姿勢が読み取れる。

研究成果の概要(英文)：I investigated a secular variation of gatekeeper and end user in the elementary school. As a result, the next point became clear. The child becomes gatekeeper by interacting lively. The child comes to be able to tell anyone clearly by interacting lively.

研究分野：臨床教科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：gatekeeper

1. 研究開始当初の背景

近年、『学び合い』の考え方による授業が多く試みられるようになってきた1)、『学び合い』の考え方による授業は、授業者が学習者観、授業観、学校観を児童生徒と共有して、授業の目標を示して全員の目標達成を求め実践によるものである2)。

『学び合い』の考え方による授業が展開されることによって、児童生徒の授業内容の理解が促されるだけでなく、人間関係が改善され、いわゆる気になる児童生徒も心配でなくなることが明らかにされている3)4)。それも、クラスにおける実践だけでなく、異学年同士の授業5)や学校全体での実践6)、あるいは学校間での実践7)が行われることによって前述の教育効果が裏付けられている。

しかし、これらの成果は、同一集団内における教育実践によるものである。進級や進学によって、集団が再編成されたり新たに構成されたりした際の実態を継続して追跡調査しているものではない。義務教育段階においては、年度ごとあるいは2年度おきにクラス替えが行う方針の学校も多く存在し、そこではより多くの児童生徒との集団づくりを通してより良い社会性を習得していくことが求められている。

小学校第6学年において『学び合い』の考え方による授業を受けた児童が小学校を卒業後、中学校に進学した際に、「分からないことを誰にでも聞くことができるようになった」とか「友だちを作ることができるようになった」という感想を持つ生徒もいる8)。

『学び合い』の考え方による授業を受けた児童生徒が、進級に伴ったクラス替えによって、『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童生徒と一緒に次年度に新しい学級集団を構成した場合や、進学に伴った近隣の小学校卒業生同士のクラス編成によって、『学び合い』の考え方による授業を受けていない小学校の卒業生と一緒に新しい学級集団を構成した場合に、『学び合い』の考え方による授業が展開したときに児童生徒がどのような学びの様態を示すのかは明らかにされていない。

今後、進学や進級によって新しい集団が構成された際の児童生徒の様態が解明されることによって、いずれの集団においても『学び合い』の考え方による授業がより多く実践されることによって、教科・領域における児童生徒の授業内容の理解がより一層促される授業改善に資するとともに、生涯にわたって獲得される生きる力の解明に資することが期待される。

2. 研究の目的

本調査では、小学校第2学年から第3学年にかけてクラス替えが行われて『学び合い』の考え方による授業が始まった第3学年の新しい学級集団において、前年度に『学び合

い』の考え方による授業を受けた児童と前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童の実態について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

『学び合い』の考え方による授業を始めた公立小学校第3学年1クラス30名を対象とした。調査対象校は、小学校第2学年から第3学年に進級する際にクラス替えを行っている。また、調査対象クラスの所属する学年は3クラス編成である。したがって、調査対象クラスには、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童が10名、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童が20名存在する。

本調査においては、前年度に『学び合い』の考え方を十分に享受した上で国語と算数の授業において、毎時間『学び合い』の考え方による授業を受けていた児童を、『学び合い』の考え方による授業を受けた児童とし、そうでない児童を『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童とする。

(2) 調査実施期間

平成24年5月10日～5月14日

(3) 調査対象教科と時数

『学び合い』の考え方による授業が行われた算数2単位時間、国語3単位時間を調査対象とした。

(4) 調査方法

調査対象とした算数と国語の両授業が実施されるに当たって、各授業前に児童に対して、一人1台のICレコーダを装着させ、授業中の発話をすべて録音した。ICレコーダには番号を割り振っておき、自分の名簿番号と同じ番号のICレコーダを使用させた。

本調査では、三崎他(投稿中)の手法9)に準拠し、調査対象となる各授業の終了時に全員にアンケート用紙を配付し、当該の1単位時間の授業において、当該授業の中で教えてあげた人は誰か、当該授業の中で教えてくれた人は誰か、そして当該授業の中で一番よく分かってくれた人は誰か、当該授業の中で一番分かりやすく教えてくれた人は誰かを問うた。すべての児童が記入し終わるのを待って、その場ですべて回収した。

(5) 分析方法

第一に、各授業終了時に実施したアンケート調査の結果から、一番分かりやすく教えてくれた人を集計した。そして、一番分かりやすく教えてくれた人として回答された、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童の、前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童の総数に対する当該人数の割合を算出した。一番分かりやすく教

えてくれた人として回答された，前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童についても同様に算出した。

第二に，国語と算数のそれぞれの授業において，一番分かりやすく教えてくれた人として回答された，前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童が，一番よく教えてくれた人として回答した児童を抽出した。前者と後者の児童同士の会話のプロトコルを分析した。また，一番分かりやすく教えてくれた人として回答された，前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童についても同様に分析した。

4. 研究成果

(1) 一番分かりやすく教えてくれた人として回答された児童の出現割合についての結果

いずれの授業においても，前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けた児童の方が，前年度に『学び合い』の考え方による授業を受けていない児童よりも，一番分かりやすく教えてくれた人と回答される児童の割合が多かった。

(2) 授業中の会話についての結果

5月14日の算数の授業のめあては「一人分を同じ数ずつに分ける求め方が分かる」として示された。その問題として、「クッキーが12個あります。3人で同じ数ずつ分けると一人分は何個になりますか」が板書されて児童に示された。児童の活動時間は18分であった。

児童Aは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番分かりやすく教えてくれた人の欄の児童Bのところに印を付けた児童である。児童Bは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番よく分かってくれた人の欄の児童Aのところに印を付けた児童である。

児童Bが，応援したり，相手の理解を確認したりしていることが明らかとなった。また，児童Bの相手に尋ねるように理解を促す発話や分かりやすく表現を変えて工夫する発話が認められた。児童Aの理解の進まない状況に対しても，相手の理解に合わせて根気強く教えていた。

5月14日の国語の授業のめあては「国語辞典の引き方が分かる」として示された。そして，「引き方」の板書部分に波線を引いて，その下に「きまり」と板書した。授業者は授業展開の中で，使い方ではなく引き方としてのきまりを見つけることを求めた。授業開始9分後に，問題1として「からい，かたち，かたな」の3単語を示し，授業開始10分後に「からい かたち かたな，っていうのをー，どんな順番で出てくるかー。見つけてほしいんですねー。」と発話している。児童の活動時間は21分であった。

児童Cは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番分かりやすく教えてくれた人の欄の児童Dのところに印を付けた児童であ

る。児童Dは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番よく分かってくれた人の欄の児童Cのところに印を付けた児童である。

児童Dの，相手に考えさせるように尋ねる発話が認められた。特に，正解を一方的に教えるのではなく，相手に答えさせる工夫が施されていた。相手に分かりやすいように説明の仕方を変えて工夫する発話が現れた。児童Cの理解の進まない状況に対しても，相手の理解に合わせて根気強く教えていた。

5月10日の算数の授業のめあては「みんなが時刻と時間を求めることができる」と示された。そして，教科書23頁の仕上げの問題2の(1)「2時20分から50分後の時刻」と(2)「2時20分から50分前の時刻」の二つと，仕上げの問題3「8時40分から9時30分までの時間」の3問が出題され，全員が解くことができるよう目標設定された。児童の活動時間は19分であった。

児童Eは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番分かりやすく教えてくれた人の欄の児童Fのところに印を付けた児童である。児童Fは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番よく分かってくれた人の欄の児童Eのところに印を付けた児童である。

児童Fは，自分の使った方法を相手に伝えて教えていた。特に，相手の記述した方法を消させ，相手の発話を遮って，自分の得た知識を基準に教えていた。また，相手の方法を遮って自分の会得した方法を基準に教えていた。

5月14日の国語の授業の活動時間は20分であった。

児童Gは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番分かりやすく教えてくれた人の欄の児童Hのところに印を付けた児童である。児童Hは，授業終了後のアンケート調査用紙に，一番よく分かってくれた人の欄の児童Gのところに印を付けた児童である。

児童Hが当該児童に3回関わっているが，一度あきらめ，教師に可視化されて相手の理解を確認したり考えを引き出したりせずに，自分の到達した理解の程度を基準にしてそれを教えていた。

【文献】

- 1) 西川純：『『学び合い』ステップアップ』，173p，学陽書房，2012。
- 2) 三崎隆：『『学び合い』入門』，39-71，大学教育出版，2010。
- 3) 西川純：「勉強をしなさい！を言わない授業」，208p，東洋館出版社，2006。
- 4) 西川純：「気になる子の指導に悩むあなたへ」，150p，東洋館出版社，2008。
- 5) 西川純：「忙しい！を誰も言わない学校」，159p，東洋館出版社，2005。
- 6) 若山浩子・伊藤善隆・西川純：「へき地・小規模・複式学級を有する学校における全校『学び合い』算数の実践」，臨床教科教育学会誌，77-88，2011。

7)平成23年10月15日に、新潟県糸魚川市立南能生小学校において開催された第3回越後の会では、糸魚川市立南能生小学校の児童と糸魚川市立木浦小学校の児童による合同授業が公開された。南能生小学校の全校児童と木浦小学校の全校児童とによる合同全校『学び合い』算数の授業、南能生小学校と木浦小学校との合同異学年『学び合い』教科学習(高学年は家庭科、低学年・中学年は体育の授業)、そして2校による全員参加の『学び合い』会議である。

8)小学校第6学年のときに『学び合い』の考え方による授業を受けた中学校第1学年の生徒に対する、筆者らの聞き取り調査による。

9)三崎隆・西川純・川上早苗・桐生徹・水落芳明:『『学び合い』の考え方による授業を評価する手法の有効性に関する研究』,投稿中。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

三崎隆・西川純・川上早苗・桐生徹・水落芳明,『『学び合い』の考え方による授業を評価する手法の有効性に関する研究』,臨床教科教育学会誌,査読有,13(1),2013,111-119.

三崎隆・西川純・桐生徹・川上早苗・水落芳明,クラス替えに伴う新集団における『学び合い』の考え方による授業を受けた児童と受けていない児童との学びの特徴,臨床教科教育学会誌,査読有,13(1),2013,101-109.

[その他]

ホームページ等

<http://rika.shinshu-u.ac.jp/misaki/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

三崎 隆(MISAKI, Takashi)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号:70360964

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: